



NEWSLETTER

ニュースレター

Osaka Municipal Universities Press (OMUP)

目 次

・第7回NPO法人大阪公立大学共同出版会総会報告	常務理事 小股 憲明	1
・鼎談 OMUP出版『環境容量からみた日本の未来可能性』の著者		
大西文秀さんの学会特別賞受賞をお祝いし、今後の出版活動を語る		
出席者：大西 文秀／上田 純一／足立 泰二	…	2
・自著を語る（6）		
旅のガイドブックとしての『ニーダーラインの光景』		
船越 克己	…	4
・新刊案内	…	4
・大学出版の近未来的指向とは	…	5
・新顔紹介	…	6
・OMUPからのお知らせ	…	6

第7回NPO法人大阪公立大学共同出版会総会報告

常務理事 小股 憲明

去る6月17(日)午前10時30分より12時30分まで、大阪府立大学14号館2階のOMUP事務局に於いて第9回大阪公立大学共同出版会(OMUP)理事会を開催し、前回理事会以降の常務理事会の経過及び役員報酬について報告し、あわせて総会に付議すべき議案の審議を行った。

次いで同日午後2時00分より3時30分まで、OMUP事務局と同じフロアにある会議室に於いて、第7回大阪公立大学共同出版会(OMUP)の総会が開催された。総会成立の確認後、三田朝義理事長を議長に選出し、さらに足立泰二常務理事と小股憲明常務理事を議事録署名人に指名して、議事に入った。

第1号議案「平成23年度事業報告」では、同年度に10点の出版を行ったこと、創立10周年・法人化5周年記念事業としてジュンク堂書店難波店に於いて関西圏大学出版会ブックフェア及び講演会を開催したこと、教員が学生に奨める本を紹介した「読ん得本々」を作成し学生に配布したことなどが報告され、満場一致で承認された。

第2号議案「平成23年度事業決算」は表に示すとおりであるが、これについて出席の山本浩二監事から「適法かつ正確である」と認められることが報告され、満場一致で承認された。

第3号議案「役員等の専任」については、竹安数博氏の大坂府立大学退職にともなう理事退任、大阪府立大学大学院理学系研究科教授難波利幸氏の理事就任が満場一致で承認された。なお、他の理事、監事については全員が平成24年度までの任期となっている。

第4号議案「業務契約」については、電話秘書業務の委託契約、杉本公認会計士事務所との顧問契約、ホームページの維持・管理契約、事務局業務の契約、責任編集業務の委託契約のそれぞれについて継続することが、満場一致で承認された。

第5号議案「平成24年度事業計画」については、受託出版事業、出版物の受託販売事業、OMUPブックフェアの開催、出版目録の作成と配布、ニュースレターの発行（年間2回）、ホームページの運営、OMUPサロンの開催など、おおむね前年度と同様の事業を展開することとし、満場一致で承認された。

第6号議案「平成24年度事業予算」については、表に示すとおり、前年度をやや上回る予算規模を見込んで提案され、満場一致で承認された。

以上すべての議案が満場一致で可決され、議長の三田朝義理事長が閉会を宣言して終了した。

H23年度決算書及びH24年度予算書 (単位：円)

科 目	H23決算額	H24予算額	差 異
事業収入			
書籍売上	2,904,788	3,300,000	395,212
出版収入	著者負担	6,000,000	821,970
著者負担・大学負担・出版助成等	5,178,030	4,000,000	989,373
寄付金収入	0	240,000	240,000
入会金収入	130,000	130,000	0
その他の収入			
受取利息	291	0	-291
雑収入	97,959	100,000	2,041
当期収入合計	11,321,695	13,770,000	2,448,305
売上原価			
期首商品棚卸	648,500	1,047,779	399,279
製作費	6,273,991	6,500,000	226,009
運送・発送費	65,877	66,000	123
編集デザイン料	1,212,622	1,300,000	87,378
期末商品棚卸	-1,047,779	0	1,047,779
管理費			
雑給	2,085,735	2,200,000	114,265
福利厚生費	6,806	7,000	194
業務委託費	657,147	700,000	42,853
旅費交通費	216,929	220,000	3,071
通信費	88,504	90,000	1,496
交際費	83,240	85,000	1,760
会議費	19,193	20,000	807
水道光熱費	17,940	18,000	60
著者精算	598,670	600,000	1,330
消耗品費	13,487	20,000	6,513
事務用品費	122,511	130,000	7,489
広告宣伝	472,919	500,000	27,081
支払手数料	35,528	37,000	1,472
新聞図書費	648	1,000	352
諸会費	0	0	0
法人税等	70,057	100,000	29,943
当期支出合計	11,642,525	13,641,779	1,999,254
当期収支差額	-320,830	128,221	449,051
前期繰越収支差額	4,215,124	3,894,294	-320,830
次期繰越収支差額	3,894,294	4,022,515	128,221

鼎 談

OMUP出版『環境容量からみた日本の未来可能性』の著者 大西文秀さんの学会特別賞受賞をお祝いし、今後の出版活動を語る

出席者：

大西 文秀（ヒト自然GISラボ所長、前竹中工務店プロジェクト開発推進本部勤務、OMUP会員）

上田 純一（大阪府立大学大学院理学系研究科教授、生物科学専攻、OMUP会員）

足立 泰二（大阪府立大学名誉教授、OMUP常務理事）



写真左から上田、大西、足立の順（敬称略）

本会の書籍出版で学会特別賞

足立：この度私ども大阪公立大学共同出版会から出版された『環境容量からみた日本の未来可能性』が、『GISで学ぶ日本のヒト・自然系』（弘文堂）と共に、環境系学会の草分けである環境情報科学センターから学会特別賞に輝くという栄誉をとげられました。本当におめでとうございます。まず初めに、その経過についてお願ひします。

大西：鼎談の機会を頂きありがとうございます。「環境容量」は聞き慣れない言葉かも知れませんが、学生時代から続けていたテーマです。私はヒトと自然の関係を表すための指標と考え、5種類の環境容量の指標を設定し、「ヒトと自然の関係」を定量的に試算して、地理情報システム（GIS）を用いた可視化に努めてきました。今回2冊の拙著の出版が対象になり、環境情報科学センター賞特別賞を頂くことができ、大変光栄に思っています。皆様に感謝申し上げます。

上田：改めまして、大西先生、この度の受賞おめでとうございます。先生の書評をOMUPから依頼を受け、図書を拝見した上でお引き受けしました。タイトルを見て、耳慣れない言葉が2つありました。「GIS」と「環境容量」です。実は環境白書を見ると「環境容量」というのは昔から使われている言葉でした。「環境の収容量」という言葉は耳にしますが、「環境容量」というのがこれだけはっきりと位置づけられてカラー印刷の立派なものでお目にかかるてこれはすごい、と率直に感じた次第です。「GIS」（Geographic Information System）を用い日本の北から南まで解析され、環境容量、例えばCO₂だとか水だとかの容量の観点から環境を論じられている。なかなか斬新に感じた次第です。

「環境容量」の概念議論

大西：環境容量は、宇宙船地球号という言葉と同じ頃、1970年くらいから使われだした概念で、定まった指標ではありません。わが国では、末石富太郎阪大名誉教授のご研究をはじめ、多くの分野で活用されてきました。私は、ヒトと自然の関係を大切にしようとする学生の頃の時代背景のなか、ヒトと自然の関係を、「分母にヒトの活動の集積。分子に自然の包容力を持つ関数」として考えてみようと思いつきました。また複数の指標を設定し、ヒトと自然の関係を総合的に理解したいと思いました。学生時代のこのアイデアはユニークだったと思っています。

足立：五つのコンポーネントをレーダーチャートで明示され、可視化という意味では非常に明快ですね。事典の項目では大西先生が担当をされ、しかも、それを47都道府県に広げるというのは、学術研究を一般社会へとエクステンションする意味では多大な貢献だと思うのです。このことは私どもOMUPが出版活動として指向していることと軌を一にしています。大西先生の功績に多少なりともお手伝い出来たことは我々自身も大いに喜び、お祝いしたいという気持ちです。

上田：書評をお引き受けするまでは、環境の収容力の方がポピュラーな印象をもっておりました。私の学生時代、四日市の公害問題がちょうど大きな問題で、その時に環境の収容力、自然があってその上のヒトという捉え方が正しいと私は思いました。ヒトが活動した上でどれだけ容量として残りがあるのか、なかなか見えない。データなしにものを言っている傾向があり、サイエンティフィックではなくてどちらかといえば感情論のような気がします。そういう意味で、大西先生の研究は一目瞭然なので、現状を把握するには非常にいいと思います。今回47都道府県別に出されたので、さらに理解が深まると思います。このような環境の指標がもっとできればいいかなと思います。

大学出版会からの情報発信と科学的成果のエクステンション

足立：ところでこの本は各都道府県とか、市町村にも知ってもらえるよう努力中です。一、二の県ではお書きになられた先生の話を聞きたいとの企画もあります。大学出版会はあまたの商業出版社の中で、何を持って出版活動をするかというと、やはり研究成果なり学術的なものをいかに市民なり地域なり社会に還元していくのか。その意味で、いわゆるベストセラー的な狙いではない、というのが我々の出版会として主張だと思います。そういう意味ではこの事例はOMUP会員の皆さんに訴えるものがあると思います。

大西：東京での授賞式では、「今後の持続型社会の構築に向けて、この成果は環境情報科学に対する進歩発展への方向性を示したものである。また一般市民にもわかりやすい方法で編集されている点からも、社会に対する影響力や貢献度の面において高く評価できる」との受賞理由の紹介を頂き、目頭

が熱くなりました。

上田：率直に申し上げて、その通りだと思います。シュミレーションの話もありましたが、こういうふうな方向性を出しているというのは、なかなかお目にかかるんですね。

大西：ありがとうございます。上田先生にそのように言って頂くと大変嬉しいです。ヒトと自然の関係という、ある意味では永遠のテーマに挑んだ結果だと思っています。永遠のテーマを厳密に分析することは自分にはできないが、できるだけ分かりやすく説明したいという想いが強くありました。

足立：昨年の東北大震災以降の社会問題も、基本的にはもう少し地球レベルでものを考える、日本の機能をそれぞれの環境に適応する形で「ヒト・自然系」という言葉で把握するような形の展開を望みますね。エネルギー問題にしても、食料の問題にしも同様と思います。そういう意味でもこの問題は、教育の問題でもあると思います。エクステンションで切り開いて頂いていることを、私も意を強くしたいです。

OMUPへの注文、期待

大西：難しいですが、出版後のPR、宣伝ではなくパブリック・リレーションを工夫することが大切だと感じています。発刊時は、できるだけ早く、会員に情報発信を行い、そして学内、学外、一般市民や社会へとパブリック・リレーションを活性化させ、発展させることも大切です。

足立：会員は現時点で134名ですが、必ずチラシとニュースレターでお知らせしています。府立大学とはリポジトリ協定を締結し、大学の情報発信には最大限努力しています。学会誌や書評誌で取り上げられると反響がありますから、著者の方とも連携して、PRに努めます。

上田：おっしゃる通りだと思います。OMUPを始め出版会の意義というのは、先ほどおっしゃられた通りだと思っています。一般的書店が販売する書籍は、それは会社の規模によるでしょうけれども、何千、何万の注文があって初めて儲かる書籍ばかりではつまらないと思うわけです。出版物がどれだけ売れるかというのは大事な要因の一つではあるのですが、著者の先生に少し失礼ですが、どれだけ売れようと大事なことを社会に発信して、社会がそれを理解する。個人で買われる場合もあるでしょうけれども、組織が一冊所蔵している、それだけでも物凄く大きな意義があると思います。

また、工学や理系の分野では、単著で本を書くようになったらそれはもう実験・研究に見切りをつけて、モノグラフ的なものしか書けないのだと言われますが、シニアになればそれなりに後ろを振り返る意味で、自己主張ができるものを出版することも必要だと思います。一冊の本にフィロソフィーがあると思うんですね。それが単に一章だけ担当したとか、自分のことを言っているわけですが（笑）なかなか自分の考えとか思いをそこに収めることはできないですね。そういう意味では単著にはフィロソフィーがでているように私は思っています。

大西：ありがとうございます。自然の中によくあそんだ賜物かも知れません。今回の受賞ではこのことを受賞理由にして頂き大変嬉しいです。専門家と一般市民や社会との間の架け橋をするような書籍や情報発信がもっと増えるといいですね。

上田：会員は良く理解していると思うのですが、誰かが手綱を引っ張って情報を流していく、それをそこから関係の方にお知らせするネットワークが必要なように思いますね。

足立：大学名を冠した出版会が、言葉はよくないのですが、雨後の筈のように出来ています。その現象そのものは結構ですが、クオリティーの問題が生じます。その意味ではOMUPのようにお互いに大学は違っても切磋琢磨できる出版会でありたい。最近では、私立大学の先生方からの問い合わせがあったり、異大学所属の先生グループの共著で、あるテーマで書こうというような傾向があります。これは非常に嬉しいと思います。ここで学位を頂いた方、学部からの助成を頂いた方、学会が助成金を出して頂くなど、色々の例があります。ぜひ、事例を参考にしてスキルアップに活用頂きたいものです。それと、これは大阪市立大学の例ですけれども、国際会議をシリーズでお出しになっている数学研究所が、数学教育という立場で、英文テキストを出されました。ドイツの数学教育会の大御所を介して共同出版の相手探しをして、世界に7,000箇所者の図書館と契約しているシュプリンガー・ジャパンと契約されました。

上田：そういうサポートがあれば、これは素晴らしいと思います。（笑）いかがです。

足立：今回は大西先生へのお喜びの気持ちと同時にOMUPとして今後をどういう方向へ行くべきか、ということで鼎談させて頂く、OMUPへのメッセージを頂戴しました。この思いを胸にOMUPは前進致します。ありがとうございます。



受賞楯

自著を語る（6）

旅のガイドブックとしての 『ニーダーラインの光景』

船越 克己



ゲオルク・フォルスター（1754-94）はスウェーデンの博物学者リンネ（1707-78）、イギリスの探検航海者クック（1728-79）が脚光を浴びた世紀をともに生きた人物である。若きフォルスターは自然研究者として、クックの第2回目の航海に参加している。その体験をつづったのが『世界周航記』（英語版は1777年に刊行）であり、この著作が日本の読者に紹介されて久しい。

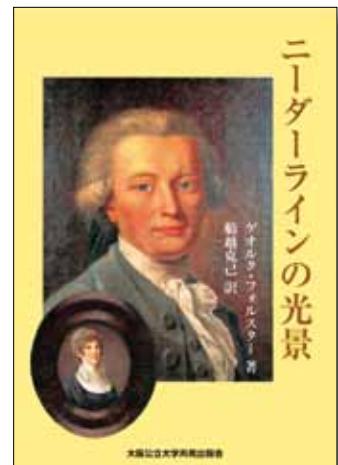
1789年に勃発したフランス革命の影響はやがてマインツ大学図書館司書フォルスターを囲繞する。1792年10月21日にマインツを占領したフランス軍の意向に沿うかたちで、フォルスターはドイツ最初の共和国、いわゆる「マインツ共和国」の樹立に邁進する。じつはそれ以前にフォルスターは革命直後の西ヨーロッパを自分の目で観察していた。友人アレクサンダー・フォン・フンボルト（1769-1859）を伴い、3か月半その地を旅行したのである（1790. 3. 25.-7. 11.）。この旅行の成果が『ニーダーラインの光景』（1791）に結実する。

『ニーダーラインの光景』にはフォルスターの関心を引くさまざまな対象が書かれている。ごらんのとおりである。かつて訳者はこの書物を旅行ガイドブックとして重宝したこと

がある。いわばフォルスターに案内されて、リエージュとブリュッセルを訪ねたのである。リエージュの「要塞」（本書157ページ）とブリュッセル公園の「四角い水盤」（同187ページ）はいまなお忘れない。公園で「水盤」とその近くの「大理石製の読書する婦人像」のあいだを何度も往復し、「水盤」の端にたたずんでいたとき、一葉だけ音もなくひらひらと舞い下りてきたのは、菩提樹の葉であったか。木漏れ日の林のなかから、公園の広場に出ると、陽光がいやにまぶしかった。1995年初秋の昼下がりのできごとである。

本書は訳者のはじめての単独訳書である。いたらない訳も多々あると思う。頭を切りかえればあるいは正せた箇所もある。「神は細部に宿る」というそうだが、句読点ひとつもおろそかにしないで、フォルスターのテキストを読むことの大切さを教えられたような気がする。

* 「ニーダーライン」とはボンからライン下流に向かって、オランダ国境まで、かつまた「ミュンスターント」、いわゆる「ニーダーライン平地」までの地域を指すのである。本書のタイトルは通常、「ニーダーラインの光景」と略記されるが、それは本来の表題『ニーダーライン、ブラバント、フランドル、オランダ [...] の光景』をつづめたものである。



ISBN978-4-901409-86-5 C3098

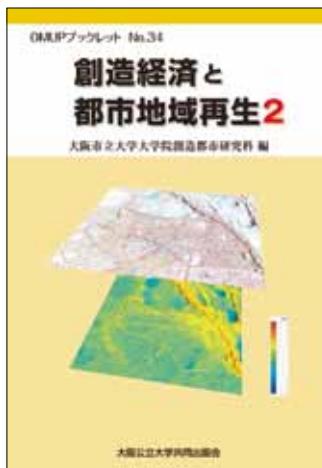
A5判、上製本、416頁
定価：本体4,500円+税

新刊書の紹介



OMUPブックレットNo.33
京都洛北の近代
—暮らし・風俗・歴史—

ISBN978-4-901409-87-2 C1339
A5判、並製本、82頁
定価：本体価格800円+税



OMUPブックレットNo.34
創造経済と
都市地域再生2

ISBN978-4-901409-88-9 C1333
A5判、並製本、88頁
定価：本体価格800円+税



いのちを守る都市づくり
【課題編】
東日本大震災から見えてきたもの

SBN978-4-901409-89-6 C1036
A5判、並製本、277頁
定価：本体価格800円+税



OMUPブックレットNo.35
吉田松陰の政治思想

ISBN978-4-901409-90-2 C1323
A5判、並製本、32頁
定価：本体価格500円+税

大学出版の近未来的指向とは

OMUP常務理事 足立 泰二

国公立大学の法人化にともない、大学名を冠した出版会が雨後の筈のように、と言つては不謹慎な表現ではあるが、設立が続いている。国立大学だけでも、2004年には弘前、広島、05年には愛知教育、06年東京農工、富山、07年は小樽商科、山形、東京芸術、筑波 等々、十指に余る大学である。「大学改革が進められる」、「研究の成果を大学側から情報発信する」、「大学のステータスが高まる」など、ブランドを売り込もうとする大学当局の思惑が見て取れる（例えば、日経6月7日朝刊記事「大学出版続々ブランド発信」）。人的にも財政上からも援助を厭わない傾向だと見方である。

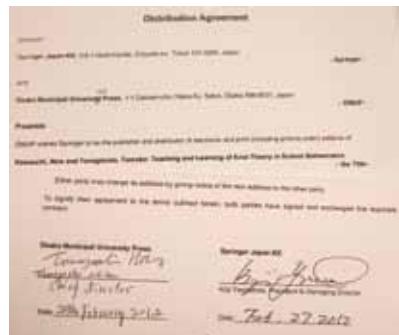
さて、我が大阪公立大学共同出版会が複数の府立系4ユニットと市立大学の構成教員に加え、同大学に属しない個人にも門戸を開いた任意団体として発足したのが2001年、2006年にはNPO（特定非営利活動）法人となって今日に至っているのとは様相を異にしているので、マスコミ取材に対応する中で感じた現状認識とは少し異なることを主張してきた。

もちろん、自前の大学に席を置く教員が日頃の教育・研究成果を世に問うこと自体は大変喜ばしいことであり、人文・社会・自然科学はもとより芸術分野であっても、学術的な成果を公表することこそ大学が地域や社会へのエクステンション貢献である。そのことは言われて久しいが、他方、日本独特な現象とも思えるのであるが、大手一般出版社の多くが学術書あるいは啓蒙書に類するものを出したがらない、出しても少部数を理由に権威主義的になって、著者への買い上げ、あるいは売れ筋のアドレス提出まで促すとさえ耳にする程である。また、最近では新書判などとして学術分野が噛み砕いた形で一般普及する傾向にあることは結構だが、しかしそれもベストセラーをねらった著名人の対談ものだったり、ゴーストライターあるいは秘書が聞き取り文章化したりするものが多く、コンピュータソフト説明書の氾濫現象にもみられるように、いわばハウ・ツーものが何と多いことか。経済至上主義の世の中、大学名を冠した学術・教養出版社の相次ぐ誕生と相成っていることは、ようやく社会、いや大学が気付く時代になったのかと思う次第である。

問題にされるべきは出版される書籍の質である。これまでにも、大学あるいは大学学部が定期的発行物「紀要」あるいは「彙報」として成果を公表しても、身内の査定では、世間一般の評価が低いものであった事実がある。その点、単独の大学で組織せず、複数の大学の構成員からなる出版活動で、自己主張して、互いに切磋琢磨あるいは刺激し合うことこそ、指向すべきではないのだろうか。大学名を冠した出版会ではなくて、例えば同一県内のコンソーシアムを組む複数大学が共同して出版会を設立し、地域学を共有、強化し社会貢献をしようと言う大学群が出て来た。まさしく、我が大阪公立大学共同出版会の趣旨と軌を一にしたものと言える。大阪公立大学共同出版会は、いわばその嚆矢の誇りを持つべきだろう。

これから大学出版の目指すべき目標にして最近OMUPが経験した3項目を紹介しておこう。

1. 大学のプロジェクト研究、学位取得論文の書籍化とその助成例：昨年当社から刊行した、「いのちを守る都市づくり」は大阪市立大学の学部横断型プロジェクトの成果だ。各種マスコミ取材もあって、やがて重版もしようかとの話もあるほど。一般の出版社ではないOMUPの力量が發揮されたものとして、今後の方向性を大いに示唆するものである。また、すでに一昨年から、大阪府立大学のある学部では学部長裁量経費を教員スタッフの学位論文を底本として、広く一般市民を意識して刊行助成されている。大学発社会貢献への一部助成とでもいえよう。出版会の運営は大学当局とは独立の組織形態を採りながらも、大学の社会貢献をしっかりと果たしているのである。
2. 大阪市立大学河内明夫教授と大阪教育大学柳沢朋子教授共編著になるOCAMIシリーズIV “Teaching and Learning of Knot Theory in School Mathematics” は国際的な研究・教育の実践テキストとして、初版を限定販売で小社から出したものの、著者からの働きかけと、ドイツの数学教育学会の先生方の推薦もあって、2版からはシュプリンガーから世界7,000にも及ぶ契約図書館にe-bookの形でダウンロードでき、かつ購入希望者には廉価で提供できるようになった。いわば、絶版なし、在庫なしのオンデマンド方式でOMUPとシュプリンガーとの共同出版である（契約書の一部写真）。今後の学術出版の一大方式を先陣切って成就したことになる。
3. 日本学術振興会の出版助成を受けて大阪府立大学高垣由美准教授の日仏比較言語学のフランス語本をフランスの2大学共同出版社とOMUPとの共同出版することができた。両国の両大学共同出版会の共働は初めてである。この出版様態を見て、書評誌は、次のような文章で締め括っている。



シュプリンガー・ジャパンとの共同出版契約

「…また、本書は海外での流通を前提としたフランスの出版社との共同出版であり、注や本文においても、外国人読者を想定した日本文化や日本語表現に関するきめ細やかな配慮が行き届いている。日本におけるフランス語学、フランス文学研究は層も厚くレベルも高いが、本書の出版形態は日本人研究者が今後取るべき方向性を示唆するものであろう。」（日本フランス語フランス文学会広報誌 cahier 09 2012年3月号p16より引用）

以上3例からもお分かりのように、大学出版社においては今後、地域貢献を推進する傍ら、国際的な協業としての情報発信にいっそう進化、邁進すべきものと感ずる次第である。

新 顔 紹 介

大阪市立大学生活協同組合

専務理事 堀 隆行

大学生協の書籍店だからこそできる商品構成、案内など学究的な見地から組合員のみなさんに役立つお店づくりができればと考えています。生協が大学教員・出版会・組合員の架け橋となるよう頑張りたいと思います。よろしくお願いします。



大阪市立大学学生協シェリー

書籍 大西 和夫

関西学院大学生協をふりだしに、大学生協一筋で歩んでまいりました。書籍事業をしっかりとやるために、食堂や購買事業の理解と協力が大切。大学生協の活動を意義あるものにするためには、とりまくすべてへの理解と発信が重要です。

大学からの要請には、要請をこえる、感動を伴った提案と実行力で答えていきたいと思っています。

縁あって、本年、年明けから市大生協にお世話になっています。兵庫県三田市から杉本町までの、通勤を超えた通勤を、有意義な何ものかに変えられないか考える毎日です。

三田牛、小山ロールに、丹波のまったく、牡丹鍋。どうぞ、よろしくお願い致します。



OMUP事務局

安田 尚子

6月より、事務職員としてお仕事させて頂くことになりました。児玉さんとともに、一冊の本が形になるまで、そして読者の皆様に無事お届けできるまで、見守っていきたいと思っています。至らないこともあるかと思いますが、どうぞよろしくお願いします。



2012年2月5日「本の学校」校長&今井書店グループ会長永井伸和氏の講演会風景

OMUPからのお知らせ



関西圏大学出版会ブックフェア&講演会

大阪公立大学共同出版会創立10周年&NPO法人化5周年になるのを記念して、2012年1月16日から2月29日までJUNKU書店難波店にて「関西圏大学出版会ブックフェア&講演会」を開催しました。OMUP以外の参加出版社は、関西大学出版部、関西学院大学出版会、大阪大学出版会、京都大学学術出版会、三重大学出版会、大阪経済法科大学出版部です。

大阪公立大学共同出版会事務局より

大阪公立大学共同出版会は、大阪市立大学および大阪府立大学における教職員と、本出版会の趣旨に賛同する者の自主的な参加を得て、研究・教育成果の発表を助成し、また民間出版社において採算上刊行を引き受けないような優良学術図書の刊行頒布の事業を行い、学術の振興および文化の発展に寄与することを目的とし、

- (1) 会員の教科書および学術研究報告の刊行頒布
 - (2) 会員の学術図書の刊行頒布
 - (3) 会員のデータベース、ソフト等電子出版物の刊行頒布
 - (4) その他前条の目的を達成するために必要な事業
- などを行なっているNPO法人です。参加を希望される方は下記事務局へお問い合わせください。

599-8531 大阪府堺市中区学園町1-1

大阪府立大学中もずキャンパス内

NPO法人大阪公立大学共同出版会（OMUP）事務局

電 話：072-251-6533 ファクシミリ：072-254-9539

e-mail：omup@hs.osakafu-u.ac.jp

U R L：<http://www.omup.jp/>

入会金：一口一円（終身会費）

振込先：三菱東京UFJ銀行 中もず支店 普通 3976510

編 集 後 記

関西圏大学出版会ブックフェア期間中、JUNKU難波店トークセッションとの共催で講演会を2度開催いたしました。多くの皆様にご参加いただきました。編集後記に代え御礼申し上げます。

(K. K)